

## 真鍋昌弘著『中世近世歌謡の研究』

一

本書は、真鍋昌弘氏の十数年来の歌謡研究の成績をまとめた論文集であり、六百頁を越える大冊として刊行された。「あとがき」に所収二十六編の論文の初出誌を示してあるが、その最も古いものは、昭和四十一年に遡る。その歳月の間に、「田植草紙」のはじめての詳密な注釈を試みた「田植草紙歌謡全考注」（昭和四九）、吾郷寅之進氏との共著の『わらべうた』（昭和五一）多數の珍しい歌謡資料を集録した編著『日本庶民生活史料集成』卷二四（民謡童謡篇）などの秀れた業績があり、歌謡研究家としての十分の力量を示しているが、ここに上記三著の土台となり、また新たに補足すべき数々の資料を含むともいえる本書が成ったわけで、学界への大きな寄与と思われる。

本書の書名に「中世近世歌謡の研究」とあるが、著者も序文にことわっているように、歌謡史の上では、「今様時代」・「早歌能謡時代」に続くべき「中世小歌時代」

から、次の「近世小歌時代」へと展開する時代の歌謡を中心としている。つまり主として室町時代末期から江戸前期のころにかけて流行した民間の抒情的な歌謡群ということになり、田植歌・小歌・風流踊歌・わらべ歌・民謡など諸種のものが考えられるわけである。

著者は先ず有名な歌謡集だけでなく、その周辺の歌謡資料を探り、また第二次的な文献として、物語・草子や芸能などに含まれる歌謡にまで、広い眼配りのもとに、資料を博搜した。次に類歌と丹念に照合しながら、「発想・表現の型、史的な流れと伝播、場と機能、背景の様相などを問題とし

二

## 新間進一

て（序文）取上げている。

本書は、諸誌に発表した論文を補訂・集成了したものであるが、歌謡のジャンルに依つて五部に大別し、各部にそれぞれ三・五章を配分することによって、均整がとれた構成を保たせていて、著者が永い年月をかけて一貫した主題のもとに研鑽を続けて来た跡がよく窺われる。次にその五部の構成・内容のあらましを紹介しながら、若干の感想を申述べてみたい。

三

第一部「田植草紙系歌謡及びその他の田歌に関する研究」は、著者が若い日の心血を注いで成った『田植草紙歌謡全考注』の別編であり、いわば個々の歌謡の注釈を主体とした前著の総論的な性格を持つものである。前著において「田植草紙歌謡の芸芸」「『田植草紙』の伝来についての整理」などを含む総説ふうの序章があつたが、量的には全体の四%弱であった。その後、「はしがき」に、

なお、まとまりある「田植草紙」全体で、あるいは個々の歌で、多くを言い落とし、割愛しているので、それらについては、また近い将来に、なんらかのかた

ちで補い深めたいと念願している。

と詰めていたか、約六年を経て、念願の実現を見たわけであろう。

さて第一部は、四章から成るか。前半の二章に田植草紙系歌謡を総括した趣の論文八編を収めている。第一章「田植草紙系歌謡」では、日本歌謡史という広い見渡しの上に、この歌謡群を置いて考察し

た。念のため注釈をつけるならば、著者の  
いう「田植草紙系歌謡」とは、広義のそれ

で、「田植草紙」の直系に近い安芸・石見系も、類縁的な備後・出雲系も、その他の

系統もすべてを含んだ形で、中国地方を中心とした一連の地図が作成された。

植草紙とその周辺歌謡」 「田植草紙関係歌  
体とする一大田植歌群の詠いてある「田

「話」といってもよいであろうが、著者はこの「田植草紙系歌謡」の語を年來用いて來

ており、『日本庶民文化史料集成』卷五で著者が担当された、田植歌本十数種の集成

の部分にも標題として用いている。狹義の

そのどの混舌が心醒ざわないとでもないか  
ほぼ定着したといつてよいであろうか。

ところで、著者の論をみると、先ず中世小歌の田植草紙系歌謡へ

の流入の様相を探り、さらには近世民謡の萌芽の迹を窺へて、る。特に古代歌謡との

接点については、田植草紙系歌謡の中に、  
吹笛的なもの、<sup>よみうた</sup>吹笛とのかかつの考え方

歌場的たるの詠歌のがたれの未だ  
れるもの、道行的なものなど、記紀歌謡の

特色と共に通する諸点を指摘している。以  
の面では、既に志田延義・土橋寛氏らの著

績があるが、それらを踏まえつつ、新し  
眼を向けている。その史的位相について、

著者は「中世小歌を中心とする諸歌謡の経緯とその歴史」を題して、その研究を開始したが、その第一回で述べたところによれば、「中世小歌を中心とする諸歌謡の経緯とその歴史」は、その研究の第一歩である。

「君の場で「あ・た」が一氣に「うが咲き」というごときものではなかつた」と要約し、

「中世歌謡締め括りの歌謡集」という輝  
しい位置を与えている。そこに著者の深

愛着も感じられる。

「藝術的性格」の名で包括された四論文は、「註

りぐき系列の歌】—恋歌】—髪の歌】など

文芸性と巫祝性との双関関係を尋ねて  
る。土の香ゆたかな庶民文芸でありなば

ら、秀れた象徴性や幻想美のある詩／ 戲りえて、必密を探らうとしてもので

成し遂げてした秘密を探るに至ったので、

で、物語・伝説のたぐい、故実・諺・歌・連歌などの断片をふくめて広い意味

用いる」としているが、この系列の歌を  
に晩歌から選んでいる。例えば八五・八

番の歌において、山伏僧伝承を見出しているが、その地盤に道成寺伝説（鐘巻）や、山伏塚の語りぐさのあることを示し、そのキイワードとしての「日高」や「くる」（塚）などの意味を示す。前著の注解を踏まえて新しい論が見られる。「恋歌」についても、卑俗なバレ歌に墮さず、雅びに仕立てられた秘密を、「象徴的な暗喩」の表現に見ていく。

第三・四章は、比較的新しい稿に属する。一は「幸若「伏見常盤」の田歌と若狭歌」、高浜七年祭の田歌」と題され、新古二つの田歌の関連に触れたものである。なお「伏見常盤」の田歌については、著者には別に詳しい論があった。（『幸若舞曲研究』第一卷所収）他の一は、「田植歌—歌謡と作業」という論文で、主として七七七五の近世小唄調を主体とする田植唄がひろく全国に分布しているが、それらの労作歌としての機能を調べたものである。この両章は、田植草紙系歌謡からは離れるが、その発展として生まれた論文であって、第三章は中世から現代へ、第四章は近世から現代へ昭射していると思われ、歌謡の伝承の意義を考える上に参考となる処が多い。

まとめられる際、もとの論文を補正された  
ようなので、もう少し読者に配慮があつて  
もよかつたかと思われる。「田植草紙」の  
原本について(二五頁)、「田植草紙」諸本  
について(四六頁)、「田植草紙系歌謡」の  
語義について(一五頁)それぞれ説明があ  
るが、バラバラで判りにくい点がある。  
専門の論文集であるから構わぬといえばそ  
れまでだが、導入の一章があつて研究史的  
展望を加えた解説風のものが欲しい気もす  
るのである。なお古代歌謡との関係の論の  
末尾に、本書の第四部「伝承童謡研究」中  
の「三匹の猿」に説かれた所説(「中」を  
よしとする伝承。四八二・四八三頁)につ  
いて、同項参照の旨、一言注記されたらと  
思う。なおこまかいことだが、「柳田国男篇  
『日本民俗学辞典』」(一三八頁の注(20))  
は、「柳田国男監修『民俗学辞典』」の誤り  
である。

#### 四

「中の歌謡」は二章を費して、古浄瑠璃・  
説経瑠璃の各正本中の歌謡を丹念に洗い  
出し、史的位相を究明している。そもそも  
は戦前に横山重氏らによるこれら正本の  
翻刻があり、さらに戦後同氏を始め室木弥  
太郎氏ら熱心な研究者によつて正本文本の  
翻刻が進められていて、その中には海外に  
流出した珍しいものも含まれていた。真鍋  
氏の記述によると、拠った主な活字本の作  
品集は八種二十五冊に及び、また「作品の  
数は約三百二十種前後あるもの」と思われ  
る由である。これらには重複もあるう  
が、ともかくこの膨大な文献を座右にして  
精力的に調査を進められたのであつた。歌  
謡としての引用、並びに地の文などにおける  
歌謡の句の引用を中心として、関係の深  
いものを涉獵した結果、第一章において  
「説経『おぐり判官』の田歌」「ふみあ  
らひ」の順礼歌」「さんせう大夫」の島追  
歌」「あくちの判官」の舟歌」「源平富士  
牧狩」と「四天王丸山あそび」のはやり  
歌」「咸陽宮」の琴歌、「いぶき山」の糸  
縹り歌」「猿引歌」「比丘尼歌」「瓢箪節  
のやつし」の九項目についての報告がまと  
まっており、さらに「物語歌謡としての性  
格」について祝言性、替え歌、予兆・暗示

の三点から論じられた。さらに、第二章に  
おいて道行その他の部分に随所に見え隠れ  
する断片的な歌謡の歌詞を丹念に拾い出し  
整理している。そしてこれらが、「概して  
抒情的な哀れ・悲しさの雰囲気を添える働  
きをなしている」ことを発見された。

第三章「室町期物語に見える歌謡」で  
は、「月林草」「草木太平記」「あるそめ  
川」「さくらの物語」「藤ふくろ」などの  
従来あまり知られていない作品の中の歌謡  
を調べたが、第四章では単独作品として  
「鼠の草子」に見える小歌を論じた。第五  
章は「閑吟集」小歌の解釈で、この面  
も著者の今後の関心の向うところのようだ  
ある。それぞれに用例豊富で、興味深く読  
み進むことができる。

第三部「風流踊歌研究」も魅力あるテ  
ーマといえよう。何故ならば近世歌謡の初頭  
を飾る歌謡群として、各藩の御船歌と、各  
地の風流踊歌があつて、ともに大量の資料  
を擁しており、個別的な翻刻・紹介が浅野  
建二氏ら諸家の手によって活潑に成されて  
来た。ただ、全体にわたる伝承系譜、内容  
の比較検討などはまだ十分でなかつた  
かと思われるからである。儀礼的に整序さ  
れた歌詞が多い御船歌よりも、庶民の間に

生動する風流踊歌の方がより興趣が深いわけであるが、中世小歌圈の歌謡を通曉した著者の研究眼がさらに下降して、この風流踊歌に向けられたわけである。著者の処女論文というべき院生時代の執筆になる「大坂府泉州地方に伝わる『こをどり』」中の『御山踊』小考」「論究日本文学」一九)があつて、こうした民俗的な踊歌にも関心が深かつたことを知る私には、自然の成りゆきのようにも思われる。

第一章「中世小歌圈歌謡としての一面」では、閑吟集・宗安小歌集などの小歌の歌詞、田植草紙歌謡の直接の伝承を追溯しているが、序説的に簡潔にまとめられた。本命は第二・三章であり、とともに「風流踊歌考」と題するが、副題に「語りぐさをめぐつて」、「同(二)」とある。風流踊歌が、中世の軍記・説話集などに活躍する人々の「語りぐさ」を豊富に取込んでいるのであるが、著者は、牛若と弁慶、牛若と関原与一、牛若と金壳吉次というふうに二十五項目に分けて摘出して説明している。とともに「恋の踊」「四季の踊」など五種の代表的な風流踊を取上げているが、「恋の踊」は数え歌形式をとるので、一覧表に整理して示すなど、くふうを加えて詳説した。こ

れらの具体的な作業には、第二部の「近世初期語り物」「室町期物語」の歌謡探索とは、また異った方法がとられているが、併せて、基礎的・資料的研究として、本書中の圧巻と称してよいと思われる。なおこの面での各論的な研究の深化を願うものである。

## 五

第四部「伝承童謡研究」は、三つの論文から成る。まず中世の古謡で珍しいわらべ歌として有名な、「聖徳太子伝」所載の子守歌の解釈を試み、またそれが愛知県のみ伝承されたということを明らかにしていふ。次に寛政期の江戸の太田善齋編『諺苑』の中から、童謡・童戯・唱言・俗謡と見なされるもの六十九項目を摘出して、類歌・類型・伝承分布などを補記している。なんだ現在、多数のしかも散在する歌謡集さらに「三四の猿」のわらべうたについて、その分布・伝承と、「中の猿」が特に取上げられる発想の秘密を探っている。何れも、伝承童謡の個別的な問題を重点的に考察したものであるが、方法がそれぞれ異っていて三者のとりあわせがおもしろい。第一・第三の部分は前著『わらべうた』と重複、補足するものという。なお著者もいわ

れるように、近世のことわざ集『譬喩尽』について、この『諺苑』と同様の作業がなされるべきであり、余人よりも先ず著者へお願いしたいと思う。

第五部「民謡研究—発想・表現の類型を中心には、今までのジャンル別の諸研究と異って、「民謡」について広くまた自由に考えようとした論文を集め、著者の今後の方向を示すところがあるような気がする。この中で、日本民謡の研究について、

その採集・記録が先学によつてかなり進んだ現在、多数のしかも散在する歌謡集・民謡集や各地郡町村誌などに極力目を通して、発想・表現の類型表をつくり、その系統だてをする。

と、基礎資料の整理のしかたを説き、その上に立つての問題点をいろいろ挙げてい。ところが別の處で、「手もとの日本民謡類型表をもとに」古代歌謡と民謡とのかかわりを取上げたと記されているので、著者には既にそういう完備した類型表が用意され、存分に活用されていることを知り得るのである。著者から直接伺つた処では、全国各地方の教育委員会や公立図書館に、その地方の民謡・童謡についての問合

せを行つて資料を収集され、春秋の学会での旅行などの機を極力利用して現地の採訪を数多くされた由である。その年来の成果が本書の研究すべての基礎になつていようが、特にこの第五部において活用され、「民謡の発想・表現の類型」というテーマを中心にして種々の問題点を呈示されたのである。

具体的に示せば、「笠を忘れた伊勢路の茶屋に空が曇れば思ひ出す」などという「笠を忘れた」系の広い分布を考慮して、笠のほか花・太刀・鳥籠・手拭などを忘れたという類歌に及んでいる。また「何の因果で木挽きを習うた花の盛りに山小屋で」などの「何の因果で……習うた」系の歌とその周辺を探り、「嫌いや嫌いや」の歌の考察へ発展し、また一見反対に見られる「……になりたや」の願望の歌の一類を示し、それらが表裏一体を成すものであることを明らかにしている。こうした具体的な例証を主としているだけに説得力がある。

この外、第五部には「民謡と古代歌謡」「近世盆踊口説歌考」「鶴姫」をめぐつての二章がある。前者についていえば、第一部の「田植草紙系歌謡における古代的なもの」と方法において軌を一にしている

が、「古代」の範囲が平安朝前半にまで拡大されていること、「万葉集」の歌謡性を積極的に認めようとしたことが印象づけられた。万葉・琴歌譜・承徳本古謡集・風俗歌の歌詞の理解や文芸性の考察の上に、近世民謡の類歌が往々役立つだらうとするわけである。古く服部躬治著『恋愛詩評』(明治三二)に、近世民謡數首をあげ、万葉の同趣の歌と比べ賞揚したことがあつたが、もちろん學問的なものではなかつた。

昭和期以降大幅に進んだ万葉の注釈の側では、近世民謡との関連などはとんと顧みられてはなかつた。然し万葉歌謡性の認識と、民俗学的な方法の導入とによって、その発想の類似を考えることは、単なる趣味的・恣意的な結びつけではなくて、一つの開かれた視点を提供するものであろう。

## 六

高浜虚子に「手毬唄かなしきことをうつくしく」(五百五十句)といふ名句がある。伝承童謡の世界には底辺に悲惨な暗いものを多く含んでいるのである。「うつくしく」は詞章における文芸的なものの介在を思わせ、また歌われる場の華やかな雰囲気を思わせる。歌謡研究において、その

歌詞のもつ意味を内容の深層にわたって十分に解明した上で、ゆたかな文芸性や、享受の場の問題を考えることは、最も重要なことであり、そうした点をしつかり押さえて、独自な論を展開された点に、著者の学風の特色がある。

今後、著者に俟つべき歌謡研究の分野への希望については、既に二、三言及したが、なお付け加えれば、今回割愛された近松淨瑠璃における歌謡を、浪速つ子で、文楽に永年親しんで来られた著者によつて吟味してほしいと思う。また別著『歌謡と物語』(宮岡薰氏との共編、昭和四九)で、露伴・一葉・竜之介の作品の歌謡資料を掲げて、蘊蓄の片鱗を示され、また泉鏡花の諸作品と伝承歌謡の研究について口頭発表されたこともあつて、近代文学作品と歌謡の問題への意欲も並々でないものがあるようと思われる。これらをさらにまとめて頂き、延いては日本歌謡史の研究の大成を、著者に期待するものである。ともあれ、本書はその貴重な道標となるものであらう。(桜楓社 A五判六一六頁 三〇、〇〇〇)

(しんま しんいち・青山学院大学)

# 真鍋昌弘著『中世近世歌謡の研究』

須藤 豊彦

口承文芸の世界に流れこんでいる海流は「歌謡」と「説話」とがその大きな範囲を占めている。口承文芸はこの二大潮流の波にのって、悠久のむかしから時の流れに添い発展し展開してきた。歌謡と説話における表現上の接点は、とてばであるが、歌謡にはさらに音楽的因素が加わるために一層華やかさが増す。ここに歌謡の発生起源の一端として、感動起源説を据える結果が導かれる道が存するのであろう。先学の歌謡起源に関する諸説には、この感動起源説ばかりに宗教起源説・性愛起源説・労働起源説・遊戯起源説・模倣起源説などの見解がなされている訳だが、少々大袈裟な言い方をすれば、生命の維持に大きく関わるもつ、衣・食・住の問題に絡む「生業」<sup>なまつ</sup>といふ点を重視するなら、宗教・労働の両起源説が最有力であり、それに性愛起源説が被り覆される様相を呈していると見られる。神を招ぎ降ろし祭る手段として、言霊の發す

る呪的効果を歌謡の起源と見做すことは曲調の方面にやや重點が傾きすぎているとも思われるけれども、これは宗教起源説の一部を形成するものであつて、原初的には生活の根源を支える「生産」<sup>なまつ</sup>と深く結びあつてゐる。所謂「ゆたかな実り」を祈つて、共同体の安全を求める心に起因しているであろう。この点、宗教起源説は労働起源説との繋がりが強力である。村の生活には労働生活とともに信仰生活が基本にあって、収穫の豊凶を司る神の存在をつよく信じてゐたからにはかならない。謂わば、労働と信仰は生活の原点であつて、宗教と労働とに関わる起源説は互いに密着しているものである。共同社会を凶作や疫病などの災害から避けるために、荒ぶる怨靈や死んで間もない新霊を鎮める目的から鎮魂の呪的動作として「踊」<sup>おど</sup>をし、「歌」<sup>うた</sup>をうたう。踊念仏はこうした経過を辿りつつ、娯楽色の濃い「新霊」<sup>あらわら</sup>を鎮める目的から田植草紙歌謡をもつた歌謡群である点で、

が、ここには田樂踊によるところの田歌などが入りこむ場が充分にあつたと見られる。いずれにしても『田植草紙』歌謡を中心として、またその系統に属する歌謡が行なわれた中世・近世には、娛樂性を伴ないながらもまだ原初的な意味でのあそびの名残りをば留めているものであつた。

歌謡研究のなかにあって、戦後田植歌謡の研究は急速に進んだ。正確にいうならば昭和三十年代ごろからその道の精銳たる研究者グループが現われ、昭和三十八年十一月に創立された日本歌謡学会における年に二回の研究発表には、そのプログラムに必ず田植歌研究者が名を連ねてきた。著者真鍋昌弘氏はその中心的存在のひとりとして大きな活躍を続けられている歌謡学者である。氏は昭和四十九年に『田植草紙歌謡全考注』の大著をすでに上梓されており、本書はそれに続くものである。が、内容には大きな抜がりがある。著者が「序」において記されている各章節の目的・意図から適宜に抽出して紹介する。

第一部 田植草紙系歌謡及びその他の田歌に関する研究  
田植草紙系歌謡は、特に田植という明確な習俗の場をもつた歌謡群である点で、

一つの独立した農民歌謡としての世界を形成している。文芸的レベル・量ともに最高位にあるとしてよからう。第一章 歌謡史上における諸種の繼承・影響関係。第二章 語りぐさ撰取に注目しながら詩的な手法を考察し、囃子田という儀礼・芸能の性格を観察。第三章 幸若舞曲『伏見常盤』に折り込まれてある田歌の伝承。第四章 近世期田植歌の標準的な一日の進行・配列を想定し歌謡と作業のかかわりを論ずる。

## 第二部 中世近世小歌研究

中世近世小歌圈歌謡に注目する。第一章 (第四章) 近世初期語り物作品や室町期物語の中に撰取されている歌謡及び歌謡的な断片を出し、作品内における効果的・役割り。第五章 「閑吟集」小歌の注釈的考察。

## 第三部 風流踊歌研究

第一章 歌詞の実体。第二・三章 どのような語り物・物語・伝説の断片が受け入れられ、風流踊歌化し定着しているかを考察。

## 第四部 伝承童謡研究

第一章 『聖德太子伝』所載子守歌についての解釈の問題点・伝承の様相。第二

章 寛政年間成立『諺苑』に散見する童謡・童戯・俗謡を出し、個々の問題を述べる。第三章 「猿が三四飛んできて」の系統をとらえ、その伝播や発想の意味を詳述。

## 第五部 民謡研究

第一・二章 それぞれ「笠を忘れた」「何の因果で」ではじまる系統を各時代各地域に指摘し、その類型の意味や民俗的背景を考察。第三章 具体的な系統をとりあげ、上代・中古歌謡との関係。第四章 うつぼ舟の姫君の伝説・物語を指しながら、盆踊口説「鶴姫」の形成について考察。

ほぼすべての章節を一貫して、発想・表現の型、史的な流れと伝播、場と機能、背景の様相などを問題にしている。ゆえに本書においては、類歌類型による歴史的実証とそれを踏まえたの実体・背景の考察をおしつぶながら、歌謡文芸の根本的な問題を考察する結果となつた。

以上の解説によつて、本書に収められてゐる内容は大方察せられよう。著者真鍋氏は田植草紙系歌謡とその周辺の田植歌にいたして永年にわたり情熱をかたむけてきた

研究者であるために、田植歌関係をまとめた第一章の分量が全体の約三割を占めているのはむしろ当然であろう。氏も書いてあるように、「類歌類型による史的な実証を踏まえての実体・背景の考察」を重点にしているために、いずれの章を繙いてみても正確かつ数多くの関係歌謡を資料として掲げ、その上に立つて繰りひろげる論の展開は精緻であり、しかも渋みがない。読者をして著者が思い描き構築しつつある歌謡史の世界へぐんぐん引きつけて離さない力。これを引力といふべきか説得力といふべきかははつきりしないけれども、この牽引力が光っている。この力の泉は、いまも言うように論の展開のあざやかさと、適格な、しかも豊富な資料によるものである。再三繰り返すことになるけれども、著者の執筆・意図が類歌・類型による史的な実証にある訳だから、ある一つの八歌の詞▽が歴史線上の上限や下限の問題においてどの位置に定着し、その歌がもつ特性を繰りひろげているかと、いう現象を見きわめて行こうとする態度が著者の基本姿勢である。ところが博摂する対象はただ歌謡の世界のみ留まらず、他の隣接文芸にまで視点が向かられてゆく。ここに著者の意欲とひた

むきな姿が見てとれる。ただし第五部第三章「民謡と古代歌謡」の項に見られるところの、△発想の類型▽という一点をもつて中世あるいは近世民謡の世界から一足飛びに古代歌謡の世界に橋越りをつけることはいかがなものであろう。古代歌謡から和歌へ、さらに連歌俳諧の道へと継承せられて民謡にまで影響を及ぼしている発想や表現法なども、短詩型を定形とする韻文においては、謂わば伝統的な手法として息づいているものもたしかに存するのであるが、時代・地域・風土などの環境や背景によつて文芸は影響を受けやすいことを思えば、充分に慎重を期すべきところであろうと思われてしかたない。

労働には、つねに肉体的な苦しさがつきまとつ。この苦しさを少しでも軽減し、慰めてくれるものが△民謡▽に有する目に見えぬちからである。集団労働の場合には歌を掛けあううちに感情も昂まり、次第に明るい興奮状態がまきおこる。こういう場の雰囲気が醸しだされてこそ仕事の苦しさは遠のき、捲るものであらう。集団労働に際して、朝の仕事始めから夕方のしまいまでの一日を、昼食や十時・三時の休憩の時を告げることも全て△▽を以て行なう。

言い換えれば、歌声が仕事の運び具合から人の使い方まで掌握・管理して進むものが田植え本来の姿である訳だが、これとまったく同じ形式を伝えるものに木遣地形がある。もともと木や石を曳く仕事であつたものが近世に入ると地形に転換してしまうのだけれども、こちらの方は「江戸の花」という意識が強力であつたためであらうか、座敷歌や遊里歌のなかにまで浸透した。ところが庶衆の間には田植歌と共に通することを知つてからはずか、ともあれ横浜の古老は今でも「田歌」と称する木遣りを伝承している。この歌は『俚謡集』にも載る。ただし田植草紙系の田植歌のごとき中世的な香を漂わせている訳でもないから、近世の田植歌の一部が単に入れこんだにすぎないものであるかもしれない。ただ食と住とに直接関わりをもつ仕事のなかに、歌を管理伝承する者が特別の職掌を与えられていたことは面白い。木遣地形は木遣師が扇を翳して木遣を歌い出すと、カワウケと称する根取衆はこの木遣に合わせて囃子詞を入れ、木遣師が歌い終ると一齊に声を揃えて土擣きをする。木遣師は通常兄と弟の二人が居るから、この光景を交互に繰り返していく。このような地形の始まりに神降しの

儀式が行われるのも、田植行事との関連において民俗信仰が根ざしているのであつた。地形用に歌う木遣は所によつて土擣歌・胴づき歌・どんどんづき歌等々名称はさまざまであるが、家の新築という祝儀性の濃い現場であるだけに、祝い酒の酔いも手伝つて明るい興奮はますますエスカレートしてゆく。こういう雰囲気になると次はバレ歌の出番も間近い。ここには村人のエネルギーが満ち溢れている。如何なるバレ歌をうたつても許しあう善意がある。これこそが共同社会の連帯感を培う土壤の一つではなかつたか。

最初に、書評の文章としては如何にもそぐわないことを以て書き出したが、実は、格調の高い中世小歌たる田植草紙系歌謡の田植歌を伝承してきた村人の生活に密着した心意を尋ねたかったのである。第一部第二章第三節「恋歌の文芸性と巫呪性」の中で『田植草紙』108番・127番・128番・63番。8番の歌謡を引用しながら、氏はバレ歌に言及している。

バレ歌は性的行為等を直接卑猥にうたつたもので、古代から近世までの各時代を通じ、集団労働の場などでうたわれてきたものである。民謡のエロスの最も徹

底した、しかも最もからつとした笑いが

そこにあって、言うまでもなく、苦しい

労働がそれによって促進され、村人の和  
合がそれによってはかられもした。バレ  
歌は労働進展という目的においてまず必  
要なジャンルである。

と述べ、次いで

バレ歌を欲する田植えの場の心性は、

古代にあるいは現代に、その時代を問わ  
ず存在するものであり、その心性の中味  
として、労働促進という面とともに、もう  
一つ稻を繁殖せしめ豊穣ならしめんと  
する大切な意味があつたのである。バレ  
歌が田人の性慾を刺激すると同じよう  
に、田の神をよろこばせ、稻の性慾をふ  
るいたたせ、やがてその結果、稻は確實  
に多くの実を孕むのである。

と言ふ。歌のちからに依る感染呪術だと見  
ておられるのであろう。しからば木遣地形  
の場におけるバレ歌の存在をばいかに見た  
らよかろう。田植え場のバレ歌も田人の赤  
裸な、しぜんに発した声として捉えてもよ  
くはなかろうか。田人にとっても下品に卑  
猥な歌を單に面白がつてうたうだけではな  
しに、それはそれなりに大事な効用を果し  
ていたものと見たい。氏はこの章節を結ぶ

にあたって

『田植草紙』歌謡が、これほど独自な  
「文芸」の世界を繰り広げることができ  
たのも、その根本にある「恋」と「巫  
呪」によるところ大であるというのがや  
はり実体であろう。

と書きおさめておられるが、これは卓見で  
ある。

本書全体にわたつて流れている時代はお  
おむねへ中世▽である。今後の中世歌謡研  
究には勿論のこと、その時代文学を知るう  
えにも欠かせない書となるであろう。

(すどう とよひこ・國學院大學)